

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 朴 桂聖
論 文 題 目 林語堂の「東西文化比較論」に関する考察
——一九三〇年代の思想、文学論を中心に——
論文指導委員 坂井 洋史教授
学位取得年月日 2004年7月30日

本論文では、林語堂の文学史上の意義を再検討するために、林の「東西文化比較論」に着目し、その中でも、林の独自性が顕著な「ユーモア」「小品文」「語録体」を通じた「新文学の模索」に焦点を当てて分析した。これらは、従来の研究では、あまりにも批判的な観点から取り扱われてきたものである。このような状況を踏まえて本論文では、林語堂の「東西文化比較論」の形成過程に注目することによって、それらに内在する林の独自性の検討を重視した。

「序章」では、本論文の独自性と意義の所在を明確にするために、従来の林語堂研究の成果及び問題点を整理するにあたっては、(1)中国における先行研究、(2)日本における先行研究、の二つの部分に分けて考察する。まず、(1)について、ここでいう「中国」とは、主として大陸を指すが、必要に応じて、台湾その他の地域における評論・研究も取り上げる。また、(1)の整理に際しては、20～40年代における同時代の評論を対象とする部分と、80年代以降今日までの学術研究を対象とする部分に分けて考察する。その理由は、林語堂を扱った評論や研究は多岐にわたるうえ、同時代の評論と後世の学術研究とでは、テクストとしての性質も大きく異なることに鑑み、整理の便宜を考慮して、このような構成とした。また、(2)について、日本における研究の内容は、戦前と戦後において大きく変化しているうえに、それを研究し紹介する人々の関心や専門によっても大きく左右されるため、林語堂の著作の翻訳者、林語堂を日本に紹介し研究した学者、林語堂の著作に内在する思想に着目した思想家のそれぞれに分けて整理する。このように、日本における研究を特に取り上げたのは、林語堂に対する研究の視点やその評価が中国と日本では異なっているからである。日本における研究を考察することは、中国においてこれまであまり注目されてこなかった林語堂の一側面を明らかにするとともに、林語堂の中国文学史上における位置を再検討するという本論文の目的を達成するためにも、必要な作業であると考えたからである。

大陸においては、同時代の論者による評価は、魯迅、胡風に見られるように、「社会性」の問題が厳しく問われ、この価値判断基準によって林の文学性が決定づけられた。つまり、「フェアプレイ」「論語派」批判を巡る魯迅との応酬によって固定化した、林の「幽默」「閑適」に対する否定的イメージと、革命に背を向けた「社会性欠如」の散文作家という、胡風が提示した「古典的」評価から抜け出すことはなかった。これらを反映した従来の文学史上における林語堂評価は、

政治イデオロギーに基づいた一面的な裁断が殆どで、林の全体像を十分には捉えていない。しかし八〇年代後半になると、陳平原や施建偉、さらに王兆勝らによる「東西」という視角を取り入れた文化的観点からの研究成果によって、林語堂の復権は揺るぎないものとなった。これらの論考には、解放後の研究の空白期間を経て、八〇年代に「現代化」が国是となり、「東西」の問題が再び強い関心を集めるようになった社会情勢を背景に生まれたという性格が濃いように思えてならない。とはいえ、研究の方法においては全体的に新しい視点を提示し、多角的な分析を試みて、西洋の理論や分析方法を全般的に採用している。しかも、方法や視点の斬新さという点では、林語堂研究の新たな展開に道を拓いたといっても過言ではない。内容の面においては、主として①魯迅との関係を中心に据えた文壇的評価（フェアプレイを巡る論争）②時代の主題との親和／違和を基準とするイデオロギー的評価（「ユーモア」、「小品文」のイメージ）③東西文化融合論の代表的論客と捉える思想的評価（『吾国与吾民』等の著作）というなど、この三つの柱からなる枠組内で行われてきたといえよう。

日本の場合、戦前（戦中も含めて）においては、主に英文著作からの翻訳を中心に、アメリカから輸入紹介されていたのが「受容」の特徴だといえる。中国の現状を紹介してくれるという面で、新居格、安藤次郎、魚返善雄などにより翻訳、紹介された。しかし、新居格、安藤次郎、魚返善雄などによる翻訳、紹介では、林の作品の文学的価値を追求するよりは、むしろ中国に関する情報を提供してくれる、情報的価値を重視していたといえる。いいかえれば、文学者としてよりもむしろ、ジャーナリスト的側面が強調されていた。戦後になると、竹内好の評価、即ち林語堂は「貧弱な思想家」であり、それゆえ「今日では中国からもほとんど忘れられかけている」という評価が通説となったといえる。こうして、林語堂に関する研究は、日本では次第に少なくなり、研究対象としての興味も薄れていったと考えられる。

このような先行研究の動向を踏まえて本論文では、以下の三点を特に重視する。

1. 林語堂の「文学史上の意義」を再検討するためには、まず「東西文化比較論」に注目しなければならない。これまでの論者の研究は、林自身の論点の整理という面では確かに実証的になってはいるが、東西文化問題の幅と歴史的な奥行き、そしてそのような議論と林の見解の関係についての把握が、いまだ十分ではない。
2. さらに、「東西文化比較論」を検討し、林独自の文学論を明らかにするためには、文学・文体論の形成過程を見なければならない。そのためには、三〇年代林自ら提唱した「ユーモア」「小品文」「語録体」及び、それらの形成・発展プロセスに注目する必要がある。
3. また、林の思想と文学が体系的に述べられた『吾国与吾民』を詳細に検討する必要がある。当該書は、中国における八〇年代以後の論者の間で、一般に思想と文学の完成と見なされている。それゆえ、この作品を相対化した上で客観的に、体系的かつ緻密に分析しなければならない。

本文については、「東西文化比較論」の形成、発展のプロセスと完成という二段階に分けて、それぞれ2部（一、二章）と3部（三、四章）に分けて議論した。

第一章では、中国思想界における東西文化論戦の歴史的考察と、林語堂の東西文化論に関する諸議論とを対比させ、それらの特徴を明らかにした。第一節では、五四時期の東西文化論戦に関して、時代の趨勢にそって展開された議論を時間順に整理した。第二節では、林語堂の東西文化論に焦点を当てて、その形成・発展のプロセスについて述べた。第三節では、これらの諸議論をまとめ、対比することによって、東西文化論における林語堂の独自の論点を浮かび上がらせた。

本章の分析によれば、五四時期前期にあって、最もラディカルな伝統文化否定と西洋化を主張した陳独秀、東西文化が相互補完して、調和を目指すべきとした李大釗とは一定の親近性を持っていたし、また、恐らく張東?や梁漱溟ほどに「哲学者」でもなく、五四時期以来の「東西文化問題論戦」と呼ばれる一連の議論において提示された様々な論点及びその水準を抜いた独創性を認めることは難しい。林語堂の「東西文化比較論」にあって、独自性という点で注目に値するのは、実は散文論、文学論の体裁で書かれたものだった。この中で林は、中国文学史上の正統／異端の構図を、そのままバビット／クロウチェ、スピンガーンの対立の構図に比した上で、東西文化の差異を超えて普遍的に存在する「個性＝性霊」という価値を引き出した。彼はこのような思考を経過しつつ、次第に中国伝統文化に西洋に優越する固有の価値を見出す、いうなれば伝統回帰を果たしていくのである。というのも、林は、東西文化に関する論議に遅れて参加したのであり、また、文人の風をよしとしたであろう彼が、既存の議論の影響を脱して、独自の観点を緻密に構築することは困難だった、あるいはそのような興味もなかったと考えられるからである。また、林語堂の東西文化比較論が、全面西洋化、東西文化調和、伝統回帰といった振幅を示しつつ、大枠では東西文化問題論戦の提起した問題の範囲内での展開に終始したことを見ると、結局彼の関心や思想的転変も、一個人に固有の問題としてのみ語られるべきものではなく、西欧近代の属性としての拡張性（その表象として中国に突きつけられたのが「西洋化」である）に直面することを余儀なくされた中国の、独自のアイデンティティー模索という、より大きな枠組みに置いて考察すべきものと思われる。左翼陣営で、中国社会の独自性に関する議論が「社会性質問題論戦」として展開された三〇年代以降、林は小品文を自らの表現のスタイルとしていったわけだが、中国の独自性探索という命題が、文学表現の独自性探索という命題と結合した結果、性霊＝個性が発見され、その媒体として「小品文」が最適のものとして自覚的に選び取られていった。

第二章では、林の文体論の形成段階を五四前後と三〇年代以降に分け、それぞれの時期の論点を整理、分析することによって、文体論の形成過程を明らかにした。第一節と第二節では、五四時期以来、しばしば林語堂が表明してきた、「新たな文体」に関わる言説を歴史的に整理した。二〇年代までを前期（第一節）、三〇年代前半までを後期（第二節）に分け、西洋文体移入の提唱から、東西文化を超えた普遍性を持つ「幽默」の、「小品文」による表現を提唱し、実作により自らの主張を実践するようになるまでの過程を扱う。即ち「語録体」提唱に至るまでの、前段階の文体論の整理となる。第三節では、林語堂が三〇年代当時の白話文体（新式白話、欧化文体）

に強い不満を持っていたことを、具体例に即した批判に就いて窺い、そのような不満が、「新たな文体」建設の必要性を彼に一層痛感させたことを確認した。第四節では、新たな文体の模索を続けてきた林が、過度に欧化した白話文体への批判に発し、それに代わるべき書写文体として想定した「語録体」が、どのようなスタイルのものであったか、その主張する所を、主として文言と白話の架橋という点に着目して整理した。

五四前後、林語堂の文体を巡る議論の出発点は、イギリス流の広義に所謂エッセイのスタイルを強く意識することから始まる。林によれば、humourの純粋な音訳である「幽默」は、西欧のエッセイのスタイルに欠かせぬとされる要素から示唆を得たものだが、林はそれを西欧と中国の文学に共通して存在する要素に措定し、「幽默」及び、自由に「性霊」を解放した「表現」が存在していたとする、明末の公安・竟陵派に注目するようになる。こうして、イギリス散文と明末散文の共通点に「幽默」を発見する一方、表現主義理論家と中国のロマン主義批評家らの共通点に「性霊」を発見することによって、林の関心は、「幽默」という要素をきっかけとした、中国文学史全体の再認識へと向かう。後年の林が西欧向けにしばしば説くことになる儒道二家の異同についての見解も、その初期においては「幽默」との関係から提示されていた点を指摘しておくべきである。さらに「幽默」、「性霊」といった「内容」と、小品文、エッセイといった「形式」（林はこれをしばしば「筆調」と呼ぶ）の関係性が、自ら多くの「小品文」を執筆するうちに、次第に明確な形をとり始めた。林は、小品文に欠かせぬ要素として、「幽默」に富んでいた、「閑適」の雰囲気をもった閑談体、媚語体（媚語とは睦言ほどの意味。原文は「?語」）といった「語り口」を重視したのである。彼の具体的な小品文イメージは、自己を中心とし、閑適を格調とするもので、西洋文学でいう「個人筆調」にあたるもの（「『人間世』発刊詞」1934）、小品文筆調、即ち「媚語式筆調」、または「個人筆調」、「閑適筆調」ともいうが、即ち西洋のFamiliar Styleであり、これらを提唱することにある（「關於『人間世』」同年）、とし、自らの小品文への嗜好が、差し当たって形式＝「語り口」を重視したものであると表明する。

五四時期における西洋文体移入の主張以来、林語堂に一貫して存在し続けてきた文体への興味は、「性霊」の発露である「幽默」を、「閑適」の雰囲気を持つ「語り口」によって書かれた「小品文」で表現すべしという、文体論としての一応の形を整えたと考えられる。次に来るべきは、「閑談」、「媚語」といった「語り口」を、如何にして書記し、文学言語として洗練させるか、という問題であった。そこで三〇年代中期以降、林語堂の脳裏に浮上してきたのが、「語録体」という新たな文体であった。白話文には望ましい新文学のあり方を見出すことができず、林は自ら文学の基準を示す文体「語録体」主張の際、成語の効果的利用、伝統白話の継承、文言と白話の長所を活かした語彙の活用などを具体的に提示したことは、それまでの文言/白話を二項対立したものとして図式的に捉えた解釈の範囲を超えた画期的な主張として注目に値する。

ここまでの整理によると、彼は文言、伝統白話、欧化文体の融合という、書写言語における歴史的な断層間の架橋のみに、関心を寄せていたのではなく、同時代の口頭語、俗語、方言までを射程の中に入れていた。

九〇年代中期以降の大陸文化界では、五四ラディカリズム批判の一環として、五四新文化運動における白話文提唱が、イデオロギー主導による文学言語伝統の断絶を招いたとされ、文言文や欧化文体による新文学以外の大衆文学市場で影響力を保持した旧式白話(前に述べた伝統白話とも異なる)などが再評価された。しかし、林語堂の議論を追って見ると、上記のような五四時期白話文提唱批判が、ややもすれば革新＝白話＝音声／伝統＝文言＝書写と、文学言語状況、文化状況を二項対立に単純化して図式的に捉えているのに対して、当時の文学者の問題意識が、実際には近代書写言語確立という問題の、より深い部分までをも照射していた事実を示していたように思われる。

第3部では、林の東西文化比較論の「完成」といわれている『吾国与吾民』を取上げ、分析、整理することによって、林の文学史上の意義について再検討することを目的とした。

第三章では、『吾国与吾民』の前半にあたる「基礎論」を中心に、林の言語、思想に関する諸議論の考察を通じて、林の「東西認識」の特徴を明らかにした。『吾国与吾民』における林の言語、思想を分析、整理した結果、自国文化への痛烈な批判をともないつつも、一貫して中国の優越性を主張していたことが分かる。たとえば、中国語と英語を比較した場合、中国語の先進性を主張し、中国思想の儒/道教の偉大さを明言し、最も西洋人が否定的(中国に対する誤解)に考える中国の「ユーモア」は、中国文化全体にわたって根強いものであると主張していることから推察できる。より具体的に見ると、東西の言語の比較という方法のもとで林は、簡潔性と思考の具体性に関しては、中国語が英語に勝るものの、分析的思考は欠如していたため、西洋の学術論文の中国語訳に対する困難さなどを指摘したわけだが、林はこの原因を思想と関連して考えている。たとえば彼が、儒教と道教を語る際に、儒家思想は教育的で、自然的な人間の本性とは適合せず、これに反動的に表われるのが道家思想であるとの認識を示したのも、また、中国思想におけるロマン派である道家、古典派である儒家、両者を相互補充、相互融合してこそ、偉大な中国人となると述べたのも、この理由からであろう。言語の特徴は思想のあり方を反映するものであると林は考えているのである。このように林が言語と思想に着目していたのは、やはり「国民性」の問題と密接な関係があるというのが筆者の見解である。

緊迫した20世紀という時代的、歴史的状況の中で、西欧列強大国に対する中国内部の危機意識が高まる中で、言語問題と思想的課題とは不可分の関係であった。そして、この時代の中国において共通しているのは、いかにして識字率を高め、社会全体を変えていくかという、いうならば思想改革の一貫した問題意識であった。林が「東西」を強く意識しながら、自覚的に中国の言語問題を取り上げた背景には、言語そのものが思想的背景に密着しているという、深い認識から発せられたものではなからうか。この探索において一貫して林が着目したのは、中国文化における漢字という表意文字の役割であり、その影響が文化全体にわたって根強いものであるということである。

第四章では、『吾国与吾民』の後半に配されている「生活論」を中心に、文学に関する諸議論の分析、整理を通じて、林の「文学論」（＝文体論）の特徴を明らかにした。林は、中国文学の様相について大きく二大構図に分け、「感化」と「娯楽」と見た上で、すべての価値ある文学は、すなわち抒情文学であるとし、一貫して「自発的であることに存在価値を持つ文学」が真の中国文学のあるべき姿だと主張する。彼は、中国文学史上において大体三回、即ち唐、明、民国の大変革があったと考えている。五、六世紀頃の装飾的な美文に反対し、簡明な文体を用いることを提唱した唐朝の韓愈らの文学運動は、古典的「復古」の限界をのりこえず、古典文学の範囲内に止まっていることで、独創とは必ずしも言いがたく、前代の模倣をくり返すだけのことを指摘した。また、自我表現、独創を唱えた明末の公安・竟陵派の文人らの文学観を評価しながら、袁中郎が日常語やスラングを自らの文に取り入れたものの、文章における白話あるいは方言の使用を提唱する勇気や洞察はなかったと指摘している。林は、一般の人々が読んで分かる、聞いて分かる文体、つまり白話、方言を文章に取り入れることに主張するが、それゆえ、近代文学の成立に最も貢献したのは小説作家であり、通俗小説の書き手こそ口語文学の基礎を築いた担い手だったと、近代文学建設における小説家の意義を林は強調している。そして、このような蓄積があったからこそ、わずか三、四年の期間で胡適が主導した白話運動は輝かしい成功を収められ、さらにこの成功があってこそ、次に到来する文学における大変化、①個性的で分かりやすい文体の形成、②中国語の欧化がもたらされたとする。さらに林は、現在の中国散文は「表現力においてもその美しさにおいても世界のいかなる国の散文にも引けを取らない立派なものとなる」とのべ、中国文学の世界的水準に達しているを見なしているが、これは、イギリス文学に見られるように、日常語から採用した具体的でイメージ豊かな語彙と古典の遺産から採用した、より正確で文学的な語彙とを健全に融和させていることによるものだとしている。また、林は言語学的知識を活かし、言語の問題から文学の問題を開明しようと試みていた。言語的特徴によって生じる文学の問題、たとえば漢字から同音異義の字の生産、象形文字の使用による文化の一貫性（発音の変化に不影響）、時代に制約されない儒家の経典解釈可能、これによる文語の形成・発達、文語の学習難点による読者層の限定などを具体的に提示しながら、口語への必然性を唱えた。文語の使用は文章に極めて老成した風格を与えるが、これが中国散文の特徴乃至欠点である、という林は、優れた散文であるためには、次の六つの条件が必要になるとする。①日常生活の表現できる文体、②十分な紙幅、③文雅を重視しない、④十分に描ける人物描写、⑤形式美にとらわれない、⑥肩の凝らない、語りかけるような文体で、個人の思想を感情豊かに叙述したものであるべきだ、などと主張している。結局、林によれば、口語で書かれた小説という非古典的文学の中に存在し、人工的なことばを排して平易な日常語を用いた、あたかも炉端で閑談するような雰囲気を持ったスタイルこそ、優れた散文であり、さらに古を模倣せず、個性を表現するのが真の中国文学のあるべき姿である。これらの主張は、たとえば大衆語論争が最も激しかった34年において、「方言区ごとにラテン化を実施し文盲を消滅させること」を主張した葉籟士、「白話的古文に反対し、大衆語に手を加えて文を書くこと」を主張した魯迅、「第一流の白話文学が標準語となること」と主張した胡適とは、言語改革的立場の相違を感じさせる。上述した林の主張は、新文学建設問題についてより具体的な方法として提示されたものとして注目に値する。

九〇年代末、大陸学術界では、中国古代の典籍特有のスタイルである語録体は文言から白話への発展過程において極めて重要な役割を果たしたという主張が楊玉華によって提出された。彼は「語録体与中国古代白話学術」の中で、語録体の『論語』起源説を唱えながら、語録体散文が古代の教学活動に起源をもつとし、孔子の門下の後学によって記録整理された孔子教学実録『論語』は中国歴史上はじめての語録体著作だと主張している。こういった主張は、実際林語堂によってすでに提出された問題提起であることが本稿で明らかにされた(第二章、第一節を参照せよ)が、実際胡適も「文学改良芻議」の中で触れているが、それは興味本位での口語文学への関心から出た語録体の提起であっただけに、林語堂の主張とは相異なる。もう一つ、前述した当時の胡適の口語文学提唱に対して、林は直ちに「論漢字索引制及西洋文学」(1918)を書いてそれを支持した。この一文の内容には、一つ重大な意味が包含されている。林の散文論は、周作人におけるイギリス・エッセイと明末公安・竟陵派の影響が強いものと研究者によってしばしば指摘されるが、しかし林語堂は北京大学の言語学教授をしていた頃、つまり周作人の一連の主張より十年も前に上記の一文において、西欧の散文の長所を積極的に採り入れることを主張したのである。第二章で確認したように、林が直接イギリス散文の新しいスタイルの導入を試みたと思われる箇所が散見される。要するに、林にとって「新文学」模索の起点は、言語学者として漢字索引問題について思考していた「この時期」だと考えてよいだろう。

新文体の模索と文学史解体、再構築への挑戦

中国近代文学史における林の位置づけを考える際、三〇年代における林の文学主張は「読者」を意識した、「読者」(読み手)と「作家」(書き手)の関係を重んじる、というスタイルの文体に徹底的にこだわっていることが分かる。特に彼が注目した、最上の文学的要素とし、文学作品の最高の目標とする「自我表現」という視点から中国文学を眺めてみれば、明らかにそこから文学史の一つの流れが看取できる。孔子を元祖として、宋代の格律に拘束されず、自由自在に詩を書いた蘇軾、黄山谷、ラディカルな思想として、道德教化に有害なものとして排斥された明の公安・竟陵派、李笠翁、清代性霊派の袁枚を貫くものがあるとするれば、それは聖賢の心の表現ではなく、「作家の心の表現」、「語りかけるような自然なスタイルの文体」を体現させる文学理論的なある性向であろう。このような先人の薫陶を受けて、さらなる新文体へと思考を進めていく過程こそが、林語堂が主幹していた民国における『論語』『人間世』『宇宙風』の活動であろう。

総括するに、これまでの林の思想・文学活動を総括するに、文壇に関与し始めた二〇年代から十年間の活動を顧みるとき、林語堂が堅持した主張は中国的伝統からの脱却と西欧化の推進、西洋化を通じての中国伝統文化の再生をはかった、すなわち「西欧化」一言に象徴される、と結論づけることはできまい。林語堂の「西欧化」主張は、思想の変化に振幅を見せつつ、三〇年代後半になると次第に「中国化=伝統中国の再評価」へ傾斜していくことであるが、この移り変わりの狭間で生まれたのが「東西文化比較論」である。さらに林はこれを通じて自らの文学論を完成させたのである。いわば林の東西論は、西欧近代理論を参照しつつ、中国の民族的・文化的な伝

統の更生、両者の比較、有機的な融合、その結果導き出される「中国の優越」にその特色があるといえる。優越意識と被害意識はコインの裏と表のように常に混在するもので、これがアジアの近代だと理解する立場もいる。林が中国の優越を主張するのもこれと無縁ではなかろうが、やや視点を変えれば、今日西洋中心主義的眼差しを潜めて進められているグローバル化によって、自国や自国民の秩序を安定化させるためにナショナリズムの強化が余儀なくされた。東洋と西洋の問題になると、この問題はより一層力を増す。中国、中国人としてのアイデンティティー模索を林自らの思想、文学を通して表現したといえるが、この問題は林語堂という一個人に限らず、東洋と西洋の共通課題として解決すべき重大な問題である。

以上、本稿では林語堂の思想、文学の根源を成している「東西文化比較論」を明らかにすることで、彼の文学史上の意義問題を再検討する、ということを出発点とした。しかし、実行にあたって、文学史の深みと観点のひろがりの中で追求するということになる、その作業は想像以上に困難な仕事であった。また研究対象のすべての要素を限なく把握することは、一生の仕事としても容易なわざではない。もちろん筆者は新しい林語堂像を再構築するという全体的な課題を念頭において論文の構成を練ったのであるが、実際にできあがったのを見ると、まだ多くの隙間や未熟な部分もしくは未解決の問題が残っていることを認めざるをえない。第一に、林の文章論の核心である「自我表現」などは、中国文学史上において、どこにその起源があるのかという問題を深くまたは幅広く検討した上で解明するまでには至らなかった。第二に、「語録体」についても、最近の研究成果を視野に入れれば、やはり筆者の浅学非才で断片的な理解にとどまっているような感を否めない。私が解明したものは、さしあたり最も肝心な部分であると思われる林の文体論の中心を示す「語録体」であるにすぎない。しかし「語録体」にはその他にも内容豊かなものがたくさん含まれている。そのすべての含蓄に関して、本稿ではそれを示唆する以上のことはできなかった。今後を期したいところである。以上の問題点が今後改善されるべきものとして残るが、本稿で明らかにしたものを吟味しもしくは反省する作業を含めて、それを活かしながら、東西文化を中心テーマとしてそこから波及してくる様々な文学の問題について、とりわけ同時代人の諸説の同時並行的な検討を通じて、清末民国初期における中国人の東西観が文学に及ぼしている影響を及ぼしているか、すなわち東西観の文学に対する作用面についてさらに綿密に考察していきたい。